「ダミー・ナイフ」

作・サカイリユリカ

登場人物

シュン　部屋の住人
女　シュンの母親
男A
男B

■シーン1

薄暗い、アパートの1室。
男2人組が部屋にこっそりと忍び込んでくる。
男2人が耳打ちするように喋りながら客席の最前列に陣取り、座る。

男A「いいんですかここで」
男B「数打ちゃ当たるさ」
男A「はあ」
男B「面白いモンが見られるぞ」
男A「ほんとスか　それこないだも言ってましたよね」
男B「いいぞ、なんなら賭けるか？」
男A「やんないッスよ、それよりコレ、早く」

男A、サングラスらしきものをBに手渡し、自分もそれをかける。
玄関のドアが開く音。
部屋、暗転。

明転すると、部屋中央で女が寝そべってくつろいでいる。
シュン、手紙の束を持って部屋に入ってくる。

女　「おかえりなさい」
シュン「あぁ」
女　「なァに、もう、疲れた顔しちゃって・・ふふっ、今日も一日、お疲れさま！」
シュン「・・・・」
女　「あらァ、どしたのその手紙」

女、シュンににじり寄ろうとする。

シュン「・・・・・」

シュン、手紙の束を女に投げつける。
薄暗くなる室内。固まる時間。
女、静かに部屋の隅へ移動。座る。
シュン、舌打ちし、クローゼットへ向かう。クローゼットを開く。
羽織っていた上着を脱いでハンガーにかける。

沈黙の間。

シュン「あっ」

クローゼットの中にかかっている服何着かの中から、スーツ(上着の方)がかかったハンガーを取り出す。

シュン「これ・・・」

シュン、ふいにそのスーツを抱きしめ顔を埋めようとする。

部屋、明るくなる。

部屋の隅に座っていた女、ふいに立ち上がってクローゼットの方へ歩きながら話をし出す。

シュンの側まで来ると、

女「やだ、それあたしが買ってあげたスーツじゃない・・・!覚えてる?オーダーメイドで作ってもらったのよねぇ。ほらアンタ、腕が長いから。・・こんなに埃かぶっちゃって・・虫に喰われてないかしら、あたしねぇ、このスーツ着て会社に通うアンタが見たくて・・」

シュン、そのスーツに腕を通そうとして躊躇。

女「着て見せてちょうだい、見せてほら」

強引にスーツを着せようとする女。

女「絶対似合う!カッコいいよ」

シュン「え、でも・・じゃあ・・」

シュン、スーツを女になすがまま着させられる。

女「ふふふ、やっぱり良いなあ」

シュン「そう、かな?」

女「うん、カッコいい」

女、シュンを抱きしめ、首筋の匂いをかぐ。

女「あれぇ、お風呂、入ってないでしょう?」

シュン「あ・・うん」

女「(シュンの頭をなで)髪・・後で切ろうね。ほんともう、シュンちゃんはいつまでたっても」

シュン「・・・何だよ」

女「こわい顔しないでぇ。」

女、驚いて弾かれたようにシュンから離れる。
固まる時間。
女、もとの位置(部屋の隅)に移動。座る。

部屋、薄暗くなる。

■シーン2

シュン、ベランダに出る。洗濯物をとりこみ始める。

部屋、明るくなる。
女、ベランダに出て行く。

女　「いいのよそんなことしなくて！」
シュン「えっ？」
女　「あたしがやるんだから、ほら！中入って」

女、シュンをベランダから追い出し、洗濯物をとりこみ始める。
女、ベランダから部屋の中へ。部屋の中央まで行き、洗濯物を丁寧にたたみ始める。

シュン「いいって、俺やるしそれくらい」

女、無視してたたみ続ける。

シュン「だからさ、」

女、無視してたたみ続ける。

シュン「はぁ」

シュン、どこか落ち着かない様子だがあきらめて雑誌を読み始める。
女、シュンが読んでいる雑誌を覗き込む。

女　「ねぇ、何読んでるの？」
シュン「は？」
女　「あっ、この人ぉ」
シュン「何、この芸能人？」
女　「あたし好きなの」
シュン「へぇ・・」

女　「今度ドラマで、お医者さんの役やるみたいねー
いいわねぇ、アンタもお医者さんになっちゃえば
あなたは頭も良いんだしちょっと頑張れば出来るわよ。
ううん、出来なきゃおかしいでしょ？」
シュン「は？軽々しく言うなよ」
女　「なれるわよシュンちゃんなら。早くならないかなあ。それでね、立派なお家建てて、暮らすの。
一緒に。早く孫の顔を見たいけど、でもシュンちゃんが結婚したら、シュンちゃんあたしのこと捨てるでしょ。面倒、みてくれる？私がしわくちゃのおばあちゃんになって寝たきりになっても・・・」
シュン「んだよ、それ・・」
女　「早くラクさせてよ、あたしに」
シュン「・・ッ消えろ・・」

シュン、女を押し倒してそのまま殴りかかろうとする。

女　「やあっ、やめて・・」
シュン「もう嫌なんだよ！俺は頑張って・・頑張りたいんだよ
ホントはちゃんと・・なのに・・」
女　「シュンちゃん・・！」

シュン、はっとして女の上からどく。ぼんやりとしている。
固まる時間。
女、そっと部屋の隅に移動。
部屋、薄暗くなる。

シュン、不安げに辺りを見回す。

シュン「・・なんか、誰かに見られてる気がする」

■シーン3

シュン、キッチンの前に立つ。流しの下の扉を開けると、そこには料理用の包丁が入っている。
それを一本、取り出す。
部屋、明るくなる。
女、部屋の隅からキッチンへ歩いてくる。

女　「ご飯つくろっか、お腹すいたでしょ」
シュン「・・うん」
女　「座ってなさい、あたしが作ったげるんだから」
シュン「俺も何か」

女、シュンを手で制す。

女　「座ってて」

女、まな板と包丁を用意する。
冷蔵庫から野菜を取り出す。　まな板の上で野菜を切り始める。

シュン「あのさ」
女　「すぐ出来るから、ね」
シュン「そうじゃなくて・・切らせて、野菜」
女　「え、」
シュン「つこう見えても、野菜ぐらいはちゃんと切れるようになったんだよ」
女　「・・・・そう。じゃあ見せてもらっちゃおうかな」

女、シュンに包丁を渡し作業を交代する。
シュン、野菜を刻み始める。

女　「上手いじゃない・・・！ほら、やっぱりやれば出来るのよねシュンは。
ア、危ない・・まだちょっと危なっかしいかしら、危ないわア」

女、シュンを後ろから抱きしめ、一緒に包丁を握る。

女　「ホラ、こうやって動かして？こっちの手はこう、ね、」

シュン、女を振り払おうとする。

女　「ね、いいわよもう分かったから、シュンがちゃんと野菜切れるぞーっていうのが
だから、もう、お母さんやるから！あなたは何もしなくていいから！」
シュン「うるさい！・！」

シュン、女の方へ振り返ったかと思うと手に持っていた包丁で女を刺す。

女、ゆっくり崩れるように床に倒れる。
シュン、着せられていたスーツを脱いで女の上にかける。

■シーン4

突如、客席の男2人が客席から立ち上がる。

男A「現行犯逮捕します」
シュン「な、何なんですか貴方たちは・・！どうして、え、どうし・・」
男B「(電話機を渡して)まあ、電話をかけたまえ」
シュン「え？電話・・」
男B「君の実家にだよ」
シュン「実家・・」
男B「早く番号を押したまえ！」

シュン、気圧されて携帯電話のボタンを押す。
男A、シュンが番号を押したのを確認するとすぐに電話をひったくって、男Bに渡す。

男B　「もしもし菅谷さんのお宅ですか、どうも、私警視庁の笹垣(ささがき)と申します。
俊さんのお母様でいらっしゃいますね？」
女　「はい」(床に倒れた状態のまま喋る)
男B　「お宅の息子さん・・菅谷俊さんなんですが・・今さっき想像殺人で現行犯逮捕されました」
女　「え」
男B　「息子さんはあなたを殺害したんですよ」
女　「わたし・・を、俊が・・？」
男B　「信じられないかもしれませんが事実です」
女　「嘘・・貴方は」
男B　「犯罪の芽を摘み取っています」

男B、電話を切って自分のポケットに入れる。

男A　「行くぞ」

２人の男、呆然とするシュンを連行しながら、

男A　「すごいッスね、当たりましたね」
男B　「だろ」
男A　「いやーしかしビビりましたよ、いつヤっちゃうのかと思って」
男B　「意外に早かったな」
シュン　「あの！」
男B　「なんだ？」
シュン　「想像殺人で逮捕されるなんてそんな」
男A　「知らなかったんスか？」
シュン　「・・・」

男たち、シュンを玄関の方へ引っ張っていく。

シュン　「あの、こ、こういう妄想とかって誰だってやってるんじゃないですか」
男B　「そうかもしれませんね。だからこそ危険なんです」
男A　「危ねぇことやらかすやつはね、普段から危ねぇ妄想してる。これ、常識ッスよ」
シュン　「・・なんだそれ」
男B　「運が良かったな、俺たちは」
男A　「不謹慎ですよ。何考えてるんスか？」
男B　「・・お前こそ、これでいくらもらえるかとかゲスなこと考えてんじゃねえのか」
男A　「まさか。だって、俺のモーソーすごいッスよ。それこそ見つかったら犯罪ッスよ」
男B　「はは、俺はもう、何も考えないぞ」
シュン　「俺は何も悪くない！これから俺をどうする気だ！俺はまだ何もやってない！」
男A　「お勉強しなおしてもらうんスよ」
男B　「大丈夫だ、そのうち何も考えられなくなる、そしたら」
男A・男B　「明るい未来が待ってます！ってか」

男たち、乾いた馬鹿笑いをする。
シュン、呆気にとられて閉口する。
男たち、「次のホシは？」「今度は女の妄想とか覗きたいッスね」など喋りながらシュンをどこかに連行していく・・・。

終幕。